

二〇一五年度

洛星中学校入学試験（国語）【前期日程】

※ 問題は冊子形式で全部で18ページあります。

※ 解答用紙は問題冊子の中にはさんであります。

【一】 次の文章は『少年』（伊藤 整 作）という小説の一部です。本文までのあらすじもよく読んで、後の問いに答えなさい。

（本文までのあらすじ）

「私」（鳴海 靖）は小学校五年生。毎日夕食の後、遠い親戚でもある稲木商店の二階に行き、稲木家の息子の房太郎とともに、田崎先生に中学受験のための勉強を見てもらっている。田崎先生は十二、三歳の女の先生で、町からこの村の小学校に赴任し、稲木家の二階に下宿していた。房太郎の話によると、若い田崎先生のもとには、町の複数の男たちから手紙が届いているらしい。房太郎は「私」に、今度その手紙を見せると約束するのだった。

房太郎は「私」よりも一年上級の、落ち着きのないこどもで、勉強もなかなかすすまない。成績も、「私」の方がよいぐらいであった。体も小さく、同級生の間では弱虫として特別視されていた房太郎は、年下の「私」を唯一の親友としてあつかっている。「私」の方も成績の面で優越感を感じられる房太郎と一緒にいることは心地がよかった。

ある日の帰り道、校庭で話をしている二人の前を、女子が四、五人通りかかった。その中には、最近隣町から引越してきた駅長の娘・西川京子がいた。

「おい、その下駄を拾ってくれよ」と房太郎が通りかかった女の子たちにいった。私は帽子を眼深くかぶったまま、Ⅰ そしらぬ風をしていた。私はポプラの並木が風に揺れては空に向かって手をふりまわすようにしながらまた起きかえるのを見ていた。葉が白く裏がえった。そういうとき、私は自分が父も母もない孤児のような気持ち

になるのであった。でなければ、わあっといって両手をひろげて風上に向かって走り出したいような感じもした。

「おい、その下駄拾ってくれよ」と房太郎はまた声をかけた。

漁師の娘で、一番身体からだの大きい竹島ハナが下唇くちびるを突き出して赤んべえ、というような顔をした。外の女の子は俯向うつむいて恥ずかしそうに急ぎ足で、私たちの前を通り抜けようとした。「誰か取ってくれないかなあ」と房太郎がまた言った。

すると、水溜まりに一番近いところを、頭を下げもせず、急ぎもしないで歩いていた西川京子が、身体を屈かがめて、下駄の歯を二本の指で A つまみあげ、私たちの腰こしにかけている柵さくまで持つて来て、「はい下駄」とそれを房太郎の鼻先へつき出した。房太郎はだまってそれを受けとった。房太郎は急に赤い顔をした。

どうもありがたうという言葉を使う習慣が私たちにはほとんど無かった。私も房太郎の家でお菓子かしをもらうときなどだまって受け、食べてしまってから、ごちそうさまと言うのであった。京子のこういう仕方はこの村のものではなかった。村の女の子たちは、房太郎が彼女等かのじょうらをからかっているのだということを知っていた。京子がそれを、頼たのまれたことだと思つて下駄を取ってくれたのは、房太郎をまごつかせた。私もびっくりした。

京子はまっすぐな眼つきで、房太郎を見、それから私の方を見て、①自分が少し変なことをしたと気がついたらしかった。京子は急に赤い顔になり、友達のを追って走った。外の女の子たちは、校門のところに集まって、溺おぼれかけた人が岸に着くのを見るような様子で京子を待っていた。房太郎は、下駄を受け取ったものの鼻緒はなおが濡ぬれているので、それを柵さくの上に、歯をまたがせて、 B 置いた。私たちは二人とも工合くあいが悪くつて、しばらく黙だまっていた。

京子は田崎先生と町にいた時からの知り合いであつたらしく、休み時間に、看護当番で田崎先生が運動場に出てくると、よくそばに立って話していた。京子は時々同級の女の子たちと遊んでいることがあつた。しかしその様子はまだこの村の女の子たちとしっくりしていなかった。女の子たちは京子をのけて、 C 仲間だけで

眼を見交わしたりしていることがあった。村の女の子たちが町の子をのけもの扱いにすることを私はよく知っていた。男の子たちですら、漁場の子と農家の子が別なグループを作っていた。私が村で育った子なのに、漁夫でも農家でもない軍人あがりの収入役の子だということと私をのけものにしがちであった。私が房太郎のような同級でもない妙な子と遊ぶようになったのも、②そういう孤独感から来ているのであった。

私は京子に同情した。京子は勉強は実によく出来て、伏見先生は、私と岩田六郎と京子とに、難しい問題を選んで授業時間中でも別にやらせたりした。それは京子が来るまでは、岩田と私の二人がさせられていた特別課題であったのだ。外の子供たちでも、その時間の課題を早く仕上げると、私たちの課題の中から一題か二題割りあてられて、するのであった。

「来年上級学校を受験するものは、今からその気になって、一題でも二題でも特別問題をしなければいけない」と先生は皆に言った。

入学試験では都会の生徒に負けるのが常であったから、教師も生徒も真剣であった。算術の特別課題をもらうと、京子はやり甲斐があるという風に、一刻も早くという調子で問題にとりかかるのであった。女生徒の席の一番後ろの隅っこに彼女はいた。私と岩田は男生徒の席の一番後ろにいたので、それが自然と競争のようになった。

もう出来たという頃になると京子はちらつと顔をあげて、素早く私と岩田の方を見ると岩田の方を見、それからもぐるような息苦しい気持ちでその問題にとりかかって、もう一息という所まで来ると岩田の方を見、それから京子の方を見るのであった。岩田は特別に数理的な頭のいい子で、たいてい一番先に仕上げて、そしらぬ顔をしているが、その次が私と京子との競争であった。一種の敵意のある、それでいて親しみのある目つきを、私は京子と交わすのであった。それでいて、外ときは私は京子と話をしたこともなかった。

放課後京子は教員室の窓の下の白ちやけた板壁にしょんぼりよりかかっていることがあった。四時になると先生たちもひける。京子は田崎先生と一緒に海岸の方へ散歩に行ったりした。二人が並んで海岸の方から戻って来

るのを時々私は見かけた。房太郎の家の前まで来ると、京子は大人のように腰をかがめて挨拶をし、駐車場の坂の方へ行くのであった。そのうち、京子は田崎先生の室で時々遊んでゆくようになった。

北の国では秋の早いうちに突然霰が降ったり、冷たい雨が障子を濡らしたりした。目に見えて日が短くなつた。房太郎の家では炉に炭火をおこした。その頃から房太郎は前より勉強に熱中しはじめた。彼が私に約束した田崎先生の手紙はとうとう見せてくれなかった。房太郎は前と変わって何だか真面目になった。そして④彼が真面目になると、私は彼との交友が面白くなるのだった。房太郎が女の子に悪戯したり、先生たちの内緒ごとをあばいたり、店の金を持ち出して、小母さんのくれる煎餅や旭豆でない、本当に甘い饅頭や羊羹の買い食いをして私を仲間に入れるのでなければ、私はつまらなかった。私が自分では出来ないことを、彼が、彼の責任でやる、そして得をするのは私だ、という形の中に、いつの間にか私は溺れていたのだった。

風は次第に寒くなり、村の周囲の山々の樹が紅葉しはじめた頃、ある朝房太郎は登校の途中の私を自家の横の戸袋のかげへ呼び込んで「おい、靖ちゃん、これを西川京子にやってくれよ」といつもと同じ青い尖った顔で言い、掌に入るような小さな封筒を握らせた。「うん」と私は言って懐へしまったが、学校にいる間じゅう、それを開いて読みたいという誘惑を感じていた。西川京子に渡してやるものか、と私は思った。それは怖ろしいことでもあり、憎らしいことでもあった。しかも私は読むことを怖れた。家へ帰る途中、私はそれをちりぢりに引き裂いて、橋の上から川の上へ投げた。紙は一度かたまって落ちて行ったが、橋脚のところではばつと散り、川上の方へ遠く吹き飛ばされるもあり、柳の木の枝の中へ吹き上げられるのもあった。

私はそのとき一刻も早くそうしないではいられぬような気持ちがあったのだ。その手紙を読まずに破いたことは私の心にⅡやましさは覚えさせなかった。でも私は興奮していた。これまでに知らなかった一種の強烈な不安の感じだった。紙が風に吹かれて川の面に散って行ったのを見ると、私はそれを誰かに見られはしなかったかと考

え、怖ろしくなった。私は橋から人家のある方へ歩きながら、あたりに気を配った。川のそばには、漁に行ったり小作をしたりする人たちの小さなわびしい家が並んでいた。軒下で縄の尻尾が風に吹かれて、はためいていた。鱗形に油を塗った紙障子の戸には煤けた小さな硝子窓などが見えたが、誰も人の姿はなかった。私は胸のあたりが焼けるようになっているのを感じた。私は家の方へ急いで帰った。畑の畔に落葉樹が四、五本立っていて、⑤横に伸びた枝は小きぎみに風にゆすぶられていた。私は家に入り、自分の小さな机の前に坐った。すると自分がこうしてられない罪人になったような気がした。房太郎にも言えないし、母にも言えないこの秘密は私の胸をおしつけた。弟や妹たちが縁先で、紙を細長く裂いては飛ばしていたが、その弟や妹たちにも自分の顔を見られるのがいやであった。晩御飯のとき、父は母に、田崎先生が学校をやめると学務委員の山田が言っていた、と話していた。

「稲木でも困るでしょう。せつかく中学校の試験を通そうと思つて房ちゃんの勉強を見てもらつているのだからね」

と母が言った。

「うん、まあ」と父は、私の前ではあまりその話に触れたくない様子であった。

「うちでも、靖がⅢやつかいになつて来たから、何かお礼をあげないといけませんね」と母が言ったが、父はうなずくだけであった。

私は食事がすむといつものように本と帳面を包んで房太郎の家へ行った。風は落ちついて静かな晩になっていた。いつもと同じに食卓の両側に私と房太郎が坐り、先生が真ん中にいて勉強をはじめた。その日房太郎の父は留守で、小母さんだけが針仕事を持つて炉端にいた。先生は白い美しい指で私の帳面に算術の問題を幾つか書いて与え、あとは房太郎の方にかかつていた。房太郎は、その晩私の方をほとんど見なかった。私は運算し、一つずつ答えを書き出して行つたが、これまでと違って、私たちの勉強ということが、小さな意味しか持つていない

ような気持ちができるのであった。⑥房太郎も私も大きな秘密を持つていて、そして私の方は、その房太郎をも裏切つてゐるのだった。しかし私は、自分のしたことが正しいと考えて自分を落ちつかせようとした。房太郎のように女の生徒に手紙をやることは、いけないことにちがいないのだから。

だが、子供の世界には、子供の世界での大人の真似があつた。あの子はその子が好きだ、とか、あの子とあの子は何々だ、とかいうことは、その村の子供たちの間では、むしろ大人たちよりもむき出しに、残酷に、そして正確に言い伝えられたり、面とむかつて喋られたりしていた。どの子がどの子に手紙をやつたなどということもよく子供の世界の噂になった。そして私ははじめて、身近にその実際のことにぶつかり、途方に暮れて破いてしまったのだった。

勉強がすんでお菓子が出てからも、その晩は田崎先生は二階の室へ上がつて行かず、炉端で小母さんと話し込んでいた。私は本を包んで帰る仕度をした。いつもお菓子のあとで、房太郎の室でしばらく遊ぶのであったが、その日は私は早く帰りたいと思つた。すると、房太郎がちらと私の方を見た。頬のところがった蒼い顔で、白眼が目立つ彼の眼は、私の様子をじつと見つめていた。彼は D 私を睨んだ。

「おや、靖ちゃん、今夜は早いんだね。もう帰るの？」と小母さんが言い、膝の針仕事を下ろして立ち上がった。私は房太郎の後について彼の室へ行つた。

「おい、靖ちゃん、あれ渡したかい？」と廊下で立ちどまつて房太郎が言った。

「うん」私は宙に眼をやつて答えた。

「どこで？」

「橋のところで」

「何とか言つたかい？」

彼の白い眼が私の顔を撫でまわすように見た。私は、ぐっとつまつた。そこから房太郎の室へ入るまでに返事を考えなければならなかった。京子はどうするだろう。そういう時に。私が帽子をかぶってあの橋のそばにいる。京子が学校の方からやって来る。すると私が呼びとめる。私は何と言って呼びとめるだろう？ 彼女が町の学校から移って来てからまだ半年ほどにしかなくていい。本当は私はまだ京子に話しかけたことがないのだった。たった一度、校庭掃除の割りあてがあったとき、副級長の私は組の者の名を伏見先生のくれた紙のとおり呼び上げたことがあった。「西川」というと、京子は「はい」と、この村のどの女生徒ともちがうはつきりした返事をして、私の方をまっすぐに見た。たいてい女の生徒は「はい」と口の中で小さな声で言うのだが、京子はちがっていた。

いま房太郎の目の前で、私は懸命に頭を働かせた。ああいう返事のしかたをする京子は、私がもし房太郎の手紙を渡したら何と言うだろう。そんな取りつきをする副級長の私を彼女が黙って睨みつけるような気がした。そしてその手紙を持ったまま、もじもじしている私を残して、さっさと行ってしまうにちがいない。

そのうちに、私と房太郎とは室へ入って坐ってしまった。私は追いつめられて飛び込むように、⑦手紙を裂いた自分と、京子の気質と思われるものとを結びつけた。

「おれね、西川が来たから手紙渡したんだよ。そしてこつちの方へ歩いて来たんだ。角のところで見たら、西川は、手紙を小さく裂いて川の上へ投げていたよ」

私はそう言って、房太郎の顔をちらっと見た。⑧自分の眼が熱く燃えているような気がした。すると、房太郎の顔は急に一層蒼ざめて、ほっそりとなつたように見えた。

「ふーん」と彼は鼻であしらうような返事をしたが、今度は俯向いて考える様子になつた。彼は中学の入学試験の算術の種本だと言っていた鼠色の表紙の本をぐるぐる巻くようにした。それは軟らかい表紙であつたが、本がかなり厚いものであつたので、思うように巻くことができず、頁がばらばらとはじけた。それでも彼は考え込み

ながら、それを巻こうとするのであつた。来年彼が中学に入れば、その本を、その次の年に受験する私に貸してくれると彼は言っていた。中学の先生の種本だということで、私はその本を借りるためには、どんなことでも彼の言うとおりになつていようと覚悟していた。それが分かつているせいか、彼は何かというと私の眼の前でその本を見せびらかすのだ。でもいま彼の頭はそれどころでなく、混乱してしまっていることが分かった。京子の手紙のことを先生や両親にいいつけはしないかと彼は心配になつて来たのだ。房太郎の混乱が私にすぐ感染した。私も彼と同罪だという考えが、ちらと心に浮かんできた。だが、渡さなかつたんだ。手紙は渡さなかつたんだ。私が房太郎のように手紙の露顯するのを心配するのはいけないことであつた。それでも、彼と一緒になつて、あの手紙のことで、先生や親たちに叱られそうな怖れを感じなければならぬような気持ちに去らなかつた。

「いいや、あんなやつ。ちよつとからかつてやっただけなんだから」と房太郎は不安を抑えるように言った。「うん」と言つて、私も彼と同じように、西川京子に手紙を渡してしまつた感じを自分の内側に持ちつづけていた。その晩房太郎は黙りがちであつたし、私は彼のために京子との交渉をうまく取りはかれなかつたのを残念に思う風にも静かにしていた。

この日からあと、私は⑨奇妙な、二つのちがつた心の動きを本当らしく進めて行かねばならないという作為の世界に入つて行つた。

甘やかされて育ち学校で出来の悪い上級生で、来年の中学校の入学試験に落ちるにきまつていても、何となく狡くつて鋭いところのある房太郎をそそのかしては、店の売り上げで羊羹の買い食いのお相伴をしたり、田崎先生に男から来る手紙の話を聞いたりすることは、私にとってぼんやりと楽しいことであつた。⑩しかし今度のこととはそれと違つていた。もつとはらはらす、危なっかしいことで、怖ろしいが、何となく新しい張り合いもその中であつた。

問一 本文10行目から23行目までの空欄AからCに入る言葉として最も適当なものを次のア

イオの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし同じ記号は二度以上は使えません。)

ア. ちらつと イ. ひよいと ウ. じつと エ. さらつと オ. そつと

問二 本文2行目から77行目までにある波線部ⅠⅡⅢの言葉の意味として最も適当なものを次のアイエの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「そしらぬ風」(2行目)

- ア. みんなの目を気にしてきんちようしている様子
- イ. 周りのことにまったく何も気づいていない様子
- ウ. 女の子の前でてれかくしをしている様子
- エ. 知っているのにわざと知らないふりをする様子

Ⅱ「やましき」(62行目)

- ア. 自分の心にはじることがあつて後ろ暗い気持ち
- イ. 正しいことをして満足している気持ち
- ウ. 言い表すことができないさびしい気持ち
- エ. 意志をつらぬくことができず情けない気持ち

Ⅲ「やっかいになつて」(77行目)

- ア. 人の迷惑になつて
- イ. 他人との取り次ぎをして
- ウ. 他人の世話になつて
- エ. 努力してよい人間になつて

問三 本文16行目に傍線部①「自分が少し変なことをしたと気がついたらしかった」とありますが、京子にとってどういうことが「少し変なこと」だったのですか。その説明として最も適当なものを次のアイエの中から選び、記号で答えなさい。

- ア. 房太郎の身勝手な要求に、自分が誠心誠意をつくしてこたえてしまったこと。
- イ. 男子のからかいにこたえないという女子同士の約束を何気なくやぶってしまったこと。
- ウ. 房太郎のからかいに気づかず、自分が正直にこたえる形の行動をとってしまったこと。
- エ. 女子がさけている男子に対して自分が全く平気なそぶりを見せてしまったこと。

問四 本文27行目に傍線部②「そういう孤独感」とありますが、それはどのような孤独感ですか。五十字以内で説明しなさい。(句読点も一字と数えます。以下同じ。)

問五

本文37行目に傍線部③「海にもぐるような息苦しい気持ち」とありますが、これはどのような気持ちを表していますか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア. この先の展開の予測がいつさいできない、不安に満ちた気持ち。
- イ. わずかな時間も気をゆるめることができない、はりつめた気持ち。
- ウ. 自分を全く冷静にみることでできないくらい、いらいらした気持ち。
- エ. 何があっても一人の力で立ち向かわなければならぬ、心細い気持ち。

問六

本文49行目に傍線部④「彼が真面目になると、私は彼との交友が面白くなるのだった」とありますが、それはなぜですか。その理由の説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア. 以前は自分には思いもよらないようないたずらや悪事を房太郎が行い、「私」はそれをわくわくしながらながめていたが、近頃の彼はいたずらの内容もありきたりでアイデアにさえがなくなってしまったから。
- イ. 以前は店の金を盗むなどいたずらも悪質なもので、とても自分にはできないようなものばかりだったが、近ごろの彼は改心したのか行動もおとなしくなり、いたずらにも悪質さがなくなってしまったから。
- ウ. 以前は子分のように「私」の命令に忠実に従い、いたずらや悪事も命令されるがままに行っていたのだが、近ごろの彼は勉強に打ちこんでいて「私」の相手をしなくなり、他に子分となる者もないから。
- エ. 以前は自分ではできそうもないいたずらや悪事を房太郎が行い、「私」はそれをながめて楽しむという関係ができていたのに、近ごろの彼はそんなことをやらなくなり、それまでの関係を失ってしまったから。

問七

本文68行目に傍線部⑤「横に伸びた枝は小きぎみに風にゆすぶられていた」とありますが、この風景を描くことによって「私」のどういう気持ちが表されていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア. 季節が変化して、厳しい冬が来たことに気づいた。親しい友人もなく、すさんだ気持ちで行動した自分を受けいれられない「私」のさびしさが、枝の動きによって表されている。
- イ. 少し前の行動について、わだかまりがまだ残っている。だれに見られたわけでもないのだが、他人の目を気にして動揺する「私」の心の様子が、枝の動きによって表されている。
- ウ. 受験前なのに、学級内の人間関係にふりまわされている。解決させたいのに、かえって問題をめんどろにしたと反省する「私」の気持ちが、ゆれ動く枝によって表されている。
- エ. 自分の気持ちだけでなく、家族の気持ちもわからない。人の心は変わりやすく、信頼できる者などないと絶望する「私」の心が、風で激しく動く枝の動きによって表されている。

問八

本文 84 行目に傍線部⑥「房太郎も私も大きな秘密を持っていて、そして私の方は、その房太郎をも裏切っているのだった」とありますが、「房太郎」と「私」にとっての「秘密」とはそれぞれどのようなことを指していますか。それぞれわかりやすく説明しなさい。

問九

本文 95 行目の空欄

D

 に入る言葉として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア. うらめしそうに悲しげに

イ. 満足そうにうれしげに

ウ. さみしそうにうとましげに

エ. 不安そうに疑わしげに

問十

本文 115 行目に傍線部⑦「手紙を裂いた自分と、京子の気質と思われるものとを結びつけた」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア. いつも男子生徒と特別問題のできを競い合う、負けずぎらいの京子の性格ならば、恥をかかされたことがある房太郎の手紙を受け取るはずなどなく、手紙を破り去った自分の行動を後に告白したとしても共感してくれるであろうという、つじつまのあう筋書きを作り上げたということ。

イ. どの女生徒ともちがう返事をする事で、この村にはなじむつもりがないという意志をはっきり示す京子の性格ならば、この村の房太郎の手紙を受け取るはずなどなく、自分がしたように、京子は手紙を破り去ることになったであろうという、つじつまのあう筋書きを作り上げたということ。

ウ. この村のどの女生徒ともちがう、きっぱりとした返事をする京子の性格ならば、男子生徒が女子生徒に手紙を渡すという許されない行為（こうい）を受け入れるはずなどなく、自分がしたように、京子は手紙を破り去ることになったであろうという、つじつまのあう筋書きを作り上げたということ。

エ. 房太郎にかかわれて顔を赤くしていた京子の性格ならば、男子生徒が女子生徒に手紙を渡すことが許されない行為だとわかっていながらも断ることなどできるはずもなく、かわりに自分が破いてやることは、京子の本心になうことであろうという、つじつまのあう筋書きを作り上げたということ。

問十一 本文119行目に傍線部⑧「自分の眼が熱く燃えているような気がした」とありますが、このときの「私」はどのような様子であったと考えられますか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 房太郎についているうそが、自分の中では本当に起こったことにうまく言えたことで、興奮している様子。
- イ 自分のついていけるうそが、房太郎にいつ見破られるかを心配して、いてもたってもいられなくなっている様子。
- ウ 京子は自分が好きな女子だから、たとえ房太郎がどんなことをしてきても、決してひるまないでいようとする様子。
- エ 自分が何気なくついたらうそが、結果として房太郎を苦しめることになるのではないかと、急に不安になっている様子。

問十二 本文136行目に傍線部⑨「奇妙な、二つのちがった心の動き」とありますが、それはどういう「心の動き」ですか。百字以内で説明しなさい。

問十三 本文140行目に傍線部⑩「しかし今度のことはそれと違っていた」とありますが、「私」はこれまでのことと「今度のこと」には違いがあると感じています。次の表はその違いについてまとめたものです。「私」の受けとめ方がア～イのように異なるのは、AとBのできごとにとどのような違いがあるからですか。「A」はく。しかし、Bはくという違いがあるから。」という形式で説明しなさい。

できごと	「私」の受けとめ方
これまでのこと ア 房太郎をそそのかしては、店の売り上げで羊羹の買い食いのお相伴をしたり、田崎先生に男から来る手紙の話を聞いたりすること。	ア ぼんやりと楽しいこと。
今度のこと イ 奇妙な、二つのちがった心の動きを本当らしく進めて行かねばならないこと。	イ もっとはらはらする、危なっかしいことで、恐ろしいが、何となく新しい張り合いもあること。

【二】 次の問いに答えなさい。

問一 次の傍線部①～⑤のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

- ① ウゴのたけのこのように工場が建設された。
- ② まちがった言い分にはシヨウフクしかねる。
- ③ 公の立場にある人がシジヨウをまじえてはならない。
- ④ 容疑者の指紋と犯行現場の指紋とをシヨウゴウする。
- ⑤ 昼夜を休まず工場がソウギヨウする。

問二 次の①～⑤を体の一部を使った表現に改めるとき、最も適当な表現を次のア～エの中からそれぞれ選び、

記号で答えなさい。

- ① 悪いなかまとつきあいをやめること。
〔ア. 足が出る イ. 足元を見られる ウ. 足がすくむ エ. 足をあらう〕
- ② すぐに暴力をふるうこと。

- 〔ア. 手をこまねく イ. 手を焼く ウ. 手がはやい エ. 手に乗る〕
- ③ よいものに見慣れて、良い悪いの見分けがつくこと。
〔ア. 目がさえる イ. 目が肥える ウ. 目が届く エ. 目を光らす〕
- ④ やつと生活をしていること。
〔ア. 口をのりする イ. 口をへらす ウ. 口をにごす エ. 口が干上がる〕
- ⑤ ひどく感心すること。
〔ア. 舌がまわる イ. 舌を出す ウ. 舌を打つ エ. 舌を巻く〕

問題は以上です。

2015年度 洛星中学校入学試験(国語)【前期日程】 正誤表

P16	イ	…恐ろしいが、…	誤
		↓	
		…怖ろしいが、…	正

2015年度 洛星中学校入学試験(理科)【前期日程】 正誤表

P5	4	問6	…何倍ですか。	誤
			↓	
			…何倍ですか。	正
			小数第二位を四捨五入して、小数第一位まで求めなさい。	
P6	4	問9	…何gですか。	誤
			↓	
			…何gですか。	正
			小数第三位を四捨五入して、小数第二位まで求めなさい。	

